

日立北高生のみなさん、読書をしていますか？

1年生は去年の今頃は勉強に打ち込んでいたと思いますが、今年は心おだやかに本を読んでみませんか？

2年生は、新年度になると時間的にも気持ち的にも余裕がなくなりがちになるので、今の時期に本を読んでおきませんか？

3年生は、環境の変化に負けない強さと未知との出会いに対応できる柔軟さを養うために、本を読んで自分を育ててみませんか？

そして本を選ぶときにはぜひ、この FROM LIBRARY も参考にしてください！

★Interview★ 長谷川 広野 先生(国語科)

Q1 先生のお気に入りの本を教えてください。

『残像に口紅を』 筒井 康隆 (著)



Q2 その本を選んだ理由は何ですか。

言葉の面白さを実感してほしいのでこの本を選びました。この小説は、章を追うごとに徐々に日本語の「音」が文面から消えていく、という設定です。音が消えると、その音を含む言葉（概念）も当然消えてしまいます。例えば、50音の「い」が消えると「犬」や「椅子」などの概念がなくなります。そして、「い」という音が小説内に現れることがなくなります。

恐ろしいことに、音がほとんど消えた世界の中でも物語は進んでいきます。最終盤では、みなさんが当たり前に使っている言葉が、ほぼ全てなくなっている状態になっているかと思います。日本語の面白さを感じながら読み進めてみてください。

Q3 日立北の生徒に一言お願いします。

何かを始めるのに遅すぎることはないと思います。何かを始めるきっかけは人それぞれでいいと思います。立派な志がなくてもいいです。ちょっと軽い気持ちで本を読んでみてください。始まりは紙媒体でも電子書籍でもネット小説でも、なんなら漫画であっていいと思います。「さて、人生を豊かにしようかな。」このくらいのノリでページをめくってみましょう。

刊行されたのはなんと1989年ですが、2017年にバラエティ番組でカズレーザーさんが話題にしたことをきっかけに、爆発的に売れ始めた作品です。限られた音でストーリーを描くという、作者の力量には驚くばかりです。

次は、図書委員さんから皆さんに、お薦めの本を紹介するコーナーです。

～図書委員のおすすめの本～

「そして、バトンは渡された」 瀬尾まいこ(著)

今回紹介する本は「そして、バトンは渡された」という本です。この本は、幼くして実の母親を亡くし、育ての親も結婚と離婚を繰り返したため、次々と親が変わる境遇で育つことになった17歳の女子高校生、優子が主人公の物語です。

父親が3人、母親が2人という複雑な家庭環境の中、血の繋がらない親に育てられた優子は、料理上手な義理の父と2人で暮らし、将来や友人関係に悩んでいました。その一方で、夫を何度も変えてきた2人目の母親である梨花は、ある日突然、愛娘を置いて姿を消します。優子に届いた1通の手紙をきっかけに、2人の物語が交差していきます。

主人公の成長や血の繋がらない親子の日常のやり取りが温かい目線で描かれ、家族とは何かを問いかけています。

離婚や結婚を何回も繰り返しているのも複雑で奇妙な話の展開ですが、家族の愛に触れられる、素敵で温かい気持ちになれる話です。「人が人を愛して心から大切にするとはどういうことなのかを感じることができます。

特に最後の親である森宮と優子の関係は、森宮が優子のことをどれだけ愛しているのかが会話の中からも伝わってきます。大切なのは「家族」や「親子」という肩書きではなく、そこに愛情が存在しているかどうかなのだと感じました。森宮だけではなく、この作品に出てくる優子とそれぞれの親たちの間には、形は違えど、それぞれに深い愛情がありました。

身近な人のありがたさと自分らしく生きることの大切さを教えてくれた本です。読み終わってもう1度タイトルを見たとき、あなたもきっと自分を、身近な人を、大切にしようと感じるはずです。

この本は映画化もされているので、小説だけではなく、ぜひ映画も見てください。

《図書委員：薄井 七海さん(1-3)より》



2018年に出版され、2019年に本屋大賞を受賞して話題作となった小説です。薄井さんも書いているように映画化もされました。評価は様々だったようなので、皆さん自身が評論家になったつもりでこの小説と映画を評価してみるとおもしろいかもしれませんね。